
夏色ノスタルジー

宮川礼治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏色ノスタルジー

【Nコード】

N6255V

【作者名】

宮川礼治

【あらすじ】

赤い鳥居の道に纏わる奇談…

祭囃子が遠くの方で幽かに聞こえる。私は永遠と続く“赤い鳥居”の道を歩いていた。出口に向かっていているのか、はたまた入口へと戻ろうとしているのか、私には分からなかった。ただ何も考えず歩いていた。

ふと気がつくと、いつの間にか祭囃子が聞こえなくなっていた。そんなに長い間私は、歩いていたのだろうか？

りりんっ……

幽かな鈴の音が聞こえた。振り返ると二頭の黒い蝶々が空を舞うように飛んでいる。

何も考えず私は、蝶々に触れようと手を伸ばすが、しかし、蝶々は私が触れた瞬間まるでシャボン玉のように砕け、消えた。

——また、迷ってしまったのかい？

優しい声が聞こえた。否、聞こえたのではない。脳内に直接“何か”が語りかけてきた。辺りを見回しても何も居ない。

もとの場所に視線を戻すと突然視界が真っ白になった。眩しさのあまり私は目を瞑った。

＊ ＊ ＊

再び目を開けるとまぶしい朝の光が視界に入ってきた。私は、自室のベッドで寝転がっていた。先ほどの出来事が夢だと理解するのに時間はかからなかった。

「衣織！いつまでもそうぼうっとしていると、遅刻するよ」

「うわっ！」

祖母がいきなり顔を目の前にぬっと出してきたから私は思わず驚きの声を出してしまった。

「うわっ、とは失礼だねえ。せっかく親切心で起こしてあげたとい

うのに」

「はあ、それはどうもすみません」

「まあいいでしょう。朝食はできているからね。さっさと支度して下りてきなさい」

それだけ言うのと祖母は部屋をでてスタスタと階段を下りて行ってしまった。

私には両親がいない。父は私が生まれてくる前にすでに他界しているらしい。母は私が五歳の時に失踪してしまった。私が、覚えていくわけではない。あくまでこれは、祖母から聞いた話である。

祖母の話によると、母失踪した日、私と母は近所にある神社のお祭りに出かけたらしい。しかし、夕方になり帰ってきたのは私だった。祖母が「お母さんはどうしたの?」と聞いても私は「蟻さんに食べられちゃったの」としか答えなかった。

私は実際にそんな事を言った覚えはないし、それ以前に私は母と出かけたという記憶もない。

まあ、そんなことで私と祖母は二人暮らした。

支度を終えリビングに行くのと祖母は椅子に座って待っていた。

「先に食べていてもよかったのに」

「一人で食事を摂るなんてごめんよ」

祖母は手を合わせてから箸を手を取った。私は祖母の前に座って手を合わせる。祖母と二人で食事をとるのは幼い頃からの日課になっている。

「そういえば衣織は高校卒業したらどうするんだい?」

祖母が唐突に私に問う。

「この近くの会社に就職したいと思っている……けど」

「大学にはいかなくても良いのかい?」

「おばあちゃん急にどうしたの?」

私が不振そうにそう問うと祖母は箸を置いて私を見えた。

「なんだかねえ、私の我儘であんたを縛っている気がしてねえ。衣織だってやりたい事があるでしょう?」

祖母の言葉を聞いて急に力が抜けた。

「何を今更。別に私特にやりたい事があるわけでもないし、それにお金だって……」

「お金の心配ならないよ。あんたのお母さんがあんたのためにためていた大学貯金もあるし、私が貯めていたお金だってあるんだからね」

祖母は胸を張って誇らしげに言った。

「学校行ってくるよ」

「行つてらっしゃい」

祖母に見送られ、私は学校に向かう。

通学路の途中に古い神社がある。茅谷稲荷。多分、母が失踪した時に私と母が来ていたというお祭りも此処で催されていたものだろう。でも、それが真実かなんて私には分からない。

ふと、視線を移すと近くの電信柱に張り紙があるのに気がついた。どうやら今夜十八時からこの神社で夏祭りがあるらしい。

「おばあちゃんでも誘つて行こうかな……」

そう呟きながら私は学校の方向へと足を進めた。

ぼうとしていた私は、自分の背後に狐の面を被った少年が立っている事には気付かなかった。

＊ ＊ ＊

祖母がめずらしく私の誘いを断った。体調が優れないらしい。

「悪いねえ、一緒に行けなくて」

「体調が良くないなら仕方ないよ。何か欲しい物ある？」

「そうだねえ、硝子細工でも買ってきてもらおうかな」

そう言つて母は私に千円札を二枚渡した。その行為が何故か私には「ちゃんと帰つて来

てくれ」という遠回しなメッセージのように思えた。

祭りの会場は大分賑わっていた。浴衣や甚平を着ている人、学校

歸りに直接ここに来たのか、制服を着ている人たち。いろんな人たちがこの場に居る。

この神社はそれなりに広いのだが、この地区の人たちが一斉に集まると身動きをとるのが困難になる。それだけの人間が此処に居るのだ。

私はやっとの思いで硝子細工の屋台に辿りつく事ができた。

屋台には、目移りするほど沢山の種類の硝子細工がある。あまりにも沢山の種類があるものだから次から次へと目移りしてしまう。しかしそんな中で私の目に一つの硝子細工が私の目にとまった。それは球体の中に蝶々がいる硝子細工だ。大きさは人差し指と親指で作った円くらいの大きさだ。

私は、蝶々の硝子細工を指差し店主に注文した。値段は二千五百円。私は、祖母から預かった千円札二枚と五百円玉を店主に渡した。

「誰かへのおみやげかい？」

店主が問う。

「体調が優れなくてこれなかった祖母へのおみやげです」

私がそう返せば人のよさそうな店主は優しい笑みを浮かべながら言った。

「優しいお嬢さんだね。そんなお嬢さんにおまけ」

そう言う店主は五百円玉と梱包された商品を差し出した。

「ありがとうございます」

私は軽く店主にお辞儀して屋台を後にした。

人の波に少しだけ疲れて境内の方に行くと、二組の家族がいた。

私は少し離れた石段で腰を下ろした。

此処に来る途中で買ったラムネの瓶を開け、一口含む。

冷たくて甘いラムネがすごくおいしく感じた。普段スーパで売っていても飲もうとは思わないのだけれど、お祭りで見るとついつい飲みたくなってしまう。

空の瓶にカランとビー玉が動く音だけが聞こえた。

ラムネを飲み終えて立とうとすると、服の裾を誰かに引っ張られ

たような気がした。その力の先に目を移すと小学生くらいの狐のお面をつけた子供がいた。

顔は見えないが服装は男の子のものだから、きっと男の子なのだろう。

「やっと気がついたんだ、お姉さん」

少年はすっきりとしたアルトボイスで笑いながらそう言った。顔は見えないが、声が笑っていた。

「どうしたの？ 迷子？」

私がそう問えば少年は首を横に振った。

「迷子だったら多分もっと違う行動をとっていると思うよ。僕はお姉さんと話しに来たんだ
少年は私の左手を握るとスツ、と立ち上がった。

「こっち来て！」

少年によって連れてこられたのは神社の裏山にある茅谷稲荷の本殿へと向かう“鳥居の道”だった。

「こんなところで一体何を話すの？」

「お姉さんのお母さんってさ……お姉さんが小さい頃に失踪しているでしょう？」

少年の言葉に私は目を見開いた。

「なん、で……」

「僕は何でも知っているんだ。あの日に何があったのかとか、君が今日見た夢とかね」

先ほどより幾分か低くなった声に違和感を覚え少年の方に目を向けると、そこには先ほどの少年の姿は無く、代わりに狩衣を纏った狐面の青年がいた。

「あ、あれ？」

「戸惑っているようだね。大丈夫、さっきの子供と僕は同一人物。

僕はこの茅谷稲荷の神様だよ」

金魚のように口をパクパクとしていると青年は「くくく」と笑った。

「僕の名前は牡丹。今も昔も君の味方さ」

「どうして、ここに連れてきたの？」

「君には知らなくてはならない真実がある」

そう残し青年は消え、私は一人“赤い鳥居の道”の中に立っていた。

祭囃子が幽かに聞こえる。

私が今いるのは、今日見た夢とまったく同じ風景の中だ。ただ、違う点が一つだけあった。それは、私の数歩前に母子の姿がある事だ。

若い母親と、幼い少女。

幼い少女に見覚えがあった。なぜなら、その幼い少女は幼いころの“私”だから。

では、少女の手を無表情で引っ張る少女が私の母なのだろうか？私は、二人の後を追った。幼い私は興味深そうにあたりを見回している。

私はふと違和感を覚えた。

さっきまでは夜だったはずなのに、鳥居と鳥居の間から漏れてくる光はまるで夕焼けのようなオレンジ色だった。

りりんっ……

重みのある鈴の音が鼓膜を擦った。音の方向に視線を移すと二頭の黒い蝶々が舞うように飛んでいた。二頭の蝶々は私を追い越して母子の後を追った。

一頭の蝶々が母の背に止まる。そして、もう一頭の蝶々は幼い私の肩の上に止まった。

母の背に止まった蝶々はまるで母の体に吸収されるかのように消えた。一方、私の肩に止まった蝶々はまるでシャボン玉のように碎け消えた。

それはまるで、私が夢の中で蝶に触れた時と同じように。

母がしゃがみ私と視線を合わせる。

私の視点はいつの間にか幼い私の視点になっていた。

「ねえ、イオリ。お母さんね、来月再婚するの」
女の声が私の脳に直接聞こえてくる。

「サイコン？」

今度は少女の声が空気と頭蓋骨を伝わって聞こえてくる。

「そう、再婚。でもね、再婚するとしたらイオリ、あなたがとっても邪魔なの」

「おかあさん？」

「やめてくれる？ 私はもうあなたの母親なんかじゃないの。あかの他人なの。ウザイからもうお母さんなんて呼ばないで頂戴」

幼い私の瞳に映るのは、酷く歪んだ女の顔。

（嗚呼、なんて醜い顔なのだろうか……）

母は、立ち上がると私を置いて立ち去った。しかし、幼い私は母を追いかけなかった。

——お母さんなんて死んじゃえばいいのに……。

そう言う少女は母親が去って行った方に歩きだす。“鳥居の道”は不自然に曲がっていた。

私は、自分の脳内に聞こえた少女の声に背筋を凍らせた。

その少女の声はまるで恨みそのもののように思えたからだ。

りりんっ……

重い鈴の音が再び聞こえた。

りりんっ……

りりんっ……

りりんっ……

りりんっ……

初めは小さくそして次第に音は大きくなり、最後には頭が痛くなるほどの大きな音になっていた。

私の前を歩く少女は、小さな手で両耳をふさいで、まっすぐ足を進める。私は少女の後ろに続いた。

五分ほど歩くと少女が足を止めた。何かを見下すように見ている。少女に駆け寄ると、ぴしゃりと水たまりに足をつっこんだ時の様

な音がした。足元を見ると粘り気のある赤い液体が流れていた。

赤い液体の流れてくる方向に視線を向けると、先程少女の手を引いていた女性、つまり母の無残な死体が転がっていた。

四肢をバラバラに引き裂かれ、その瞳には一寸の生氣はなく、氣味悪く動向を広げていた。

――嗚呼、死んでいる

私は、冷静にその遺体を見ていた。

幼い私に目を向けると、哀しむ様子はなくむしろ笑っていた。

ふと、母の死骸に小さな虫が群がっているのが見えた。それはとても小さな“蟻”だった。蟻は母に群がり、その血肉を喰らっていた。

ほんの数分で母の死骸は綺麗に消えてしまった。そして、母の死骸に群がっていた小さな蟻たちもまるで幻覚とでもいうかのように綺麗に消えてしまった。

少女がじっとこっちを見ていた。

「どうしたの？」

「おかあさん、たべられちゃったね」

そう言くと、少女はもと来た道を走り去ってしまった。

「これが真実さ」

いつの間にか隣に牡丹が立っていた。

「私が殺したの？」

指先が震え、握った拳に力が入る。

「君が殺したわけではない。君は、そうならいいと願っただけさ」

「私が願ったから死んでしまったんじゃないの？」

「それは違う。あの女はもともと十三年前の今日、死ぬ予定だった」
そう言った牡丹の口調も声もとても冷たいものだった。

「お母さんの死体はどうなったの？」

「この道の鳥居になった。この鳥居はすべて此処で死んだ人間の魂

できている」

鳥居が一瞬揺らめいた気がした。

「君は、あれを見ても母に帰ってきてほしいと願うかい？」

「分かりません。でも……、おばあちゃんは帰ってきてほしいと思っていますと思う」

そう答えると牡丹は仮面を外し優しく微笑んだ。

「君のお母さんは、生きてあの世界に帰る事はない。だけど、体だけは返すよ」

そう残し、牡丹は消えた。

＊ ＊ ＊

翌日、本殿で母の遺体が見つかった。

第一発見者は、本殿の清掃に来ていた茅谷稻荷の神主だった。

まるで真新しい死体のように美しかったが、検死の結果母は十三年前に死んでいた。あまりにも美しすぎるその死体に誰もが首を傾げた。

だけど、私は知っている。時間が止まったあの場所で母はずっと眠っていたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6255v/>

夏色ノスタルジー

2011年9月16日03時22分発行